することもあったと見るべきではなからうか。古代から中世へと時代が転変しても「神国」という言葉と文脈が継承されている限り古代からの連続面にも留意して分析を進めていく必要があるのではなからうか。

この著書の最後に「顕密体制論の現在―黒田俊雄氏の批判によせて―」と題する補論が収載されている。黒田氏が『日本中世の社会と宗教』において、佐藤氏への批判に対し佐藤氏が執筆した反論である。黒田氏に傾倒して研究を進めてきた佐藤氏の衝撃は想像するに余りある。黒田氏の批判は短編の論文であり佐藤氏の論の具体的な引用などはなされていないので、その真意は第三者に理解しかねる点が多々ある。一方で佐藤氏の反論も簡略すぎてうまく噛み合っていない点もある。黒田氏の生前に存分論争を闘わず機会があったらと叶わぬながら願うところである。また最近顕密体制論をめぐる末木文美士氏が平雅行氏に対して行った批判（末木氏『鎌倉仏教形成論』（法蔵館）を、佐藤氏はどう読まれるのであろうか興味がある。

以上、評者の無知蒙昧に加えて佐藤氏の研究分野や方法論と若干隔たりがあるため、体系的で踏み込んだ批評ができなかったことをお詫びしたい。甚だ見当違いの論評や批判もあるかと怖れるが、苦し紛れに思うところを率直に述べさせて頂いた。失礼に及んだ点があれば偏にお許し願いたい。

（北九州大学助教授）

玉懸博之著

『日本中世思想史研究』

（ベリかん社・一九九八年）

八木 聖弥

思想史において中世は、多様でさまざまな要素が錯綜した時期であるといえる。鎌倉時代には仏教の新宗派が次々と起こり、旧仏教と対峙しながら信者の拡大を図っていた。室町時代にはこの中から特に臨済禅が幕府と結びつきながら芸術にも強い影響を与えた。神祇信仰も仏教と絡みつつ、新たな側面を見せはじめ、外来の儒教や老荘思想も無視できない存在として文化の底流に流れている。こうした中世の思想は個別的に研究の対象にはなっていたが、より根元的に歴史や政治の思想として正面から論じられることが少なかった。ひとえに問題の複雑さゆえである。

本書はこうした現状にかんがみて、中世における思想の究明をめざしたものである。著者が定めた視点は、中世の人々が歴史とは何か、政治とは何か、という命題にいかに関答したか、ということに要約される。そして、この問題を論じるに当たって、超越者と人間の関係論、普遍と特殊の関係論を座標軸に置いている。石田一良氏が樹立した文化史学の方法を強く意識し

ながら、なおかつ石田氏が論じることが少なかった分野に新たな頁を加えた論考といえる。もともと「中世」の語については石田氏の論とは相違するが。

さて、本書は大きく二部構成となっている。「Ⅰ 歴史観」として4編、「Ⅱ 政治観」として5編、付論1編を収める。以下、各論を概観してみたい。

「日蓮の歴史観——その承久の乱に対する論評をめぐって」では、古代の終焉を告げる承久の乱に対して日蓮がどのように解釈したかを論じる。著者は承久の乱において後鳥羽上皇が破れた原因を、彼が法華経を守護せず、邪法たる真言を重んじたゆえであると位置づける。つまり後鳥羽上皇は「謗法」によって治罰されたというのである。そして、天皇にかわって為政者となったのは北条氏であるが、日蓮は承久の乱によって日本の国王ないし国主が天皇家から北条氏に移ったとみていると指摘する。やがて北条氏もまた謗法者といわれ、さらには日本人すべてが謗法者とされて、その結果、元寇へと流れていくと日蓮は考えた。ここで著者は日蓮の歴史観の考察を行う。日蓮は釈迦仏が主であり、それ以外のもの、日本の国も神や王もすべては従であるという世界観を持っていたといい、世の治乱は儒教的な政道観ではなく、人間が仏法を正しく受持するかいなかによると考えていたとする。著者は日蓮に儒教の影響は少ないというが、こうした主従関係の考え方と儒教思想の関係——直接・間接を問わず——が知りたいところである。

「中世神道家の歴史思想——慈遍の「救済史」の構想をめぐって」は、反本地垂迹説の思想家として名高い慈遍を取り上げ、彼が超越者と人間との関係をどのようにとらえていたかについて「救済」をキーワードに考察した論考である。著者によると慈遍の構想した「救済」の歴史は三期に分かれ、第一期（神代）は神・神道による「救済」、第二期（人代）は神の意志・計らいを前提にした仏・仏教による「救済」、第三期（当代）は神・神道による「救済」の復活、となる。神道家の歴史観については、これまで多くの研究がなされてきたとはいえないだけに貴重な論考である。「救済」の歴史を三期に分ける手法は、慈遍の時代区分論とも関係するであろう。その際、当然ながら神による「救済」というように神道中心主義の思想といえるが、他の神道家は「救済」をどのように位置づけているのか、また三期のなかで大部分は第二期となるが、この時期が神の計らいを前提としながらも仏による「救済」と考えたのは、神道家にとってどういう意味を持つのかが問われなければならないであろう。

『神皇正統記』の歴史観は、北畠親房の神道的歴史観を明らかにしたものだ。まず『神皇正統記』が執筆された当時の歴史思想を概観する。著者によれば、歴史の展開を前世の因縁によると考える宿世史観、人間の道徳に求める道德史観、王法滅亡意識と反伝統的行爲であった。ところが、親房の思想はいずれにも属さず、神意の展開による「一なる歴史」とみなした。神

意の働きは超人為的側面と道徳的側面を持ち、前者が後者を包摂するという。この法則によって歴史は変化し、合致しないときは滅亡するとみるも、王法に關しては不滅であり、歴史に価値の転換はありえないというのである。これまでの『神皇正統記』研究が、ともすれば冒頭の神国思想や武家政権の評価に重きをおく考察であったのに対して、著者はきわめて客観的に親房の思想を分析している。

『梅松論』の歴史観は、歴史思想の側面から『梅松論』を考察したもの。ここでも他の歴史書が承久の乱をどのように評価しているのから論が展開される。『梅松論』は他書と違い、武士の反抗の根拠を、為政者は天下万民のために徳政を行うべきであるという普遍的な規範に求めたことを指摘、不徳なるものが天によって罰せられ、有徳なるものが天に扶けられたという視点で貫かれていることを論証している。要するに武士政権の依拠するところは、儒教に基づく徳治主義である。これまでの諸論考にも共通していえることだが、こうした歴史書ないし思想書の特長性は、当然ながらその作者のおかれた立場と深い関係にあると思われる。特定の人物を比定しえない場合でも、内部徴証から作者の周辺は浮かび上がるはずであり、なにゆえ彼が他とは相違する思想を持つにいたったのか、この点の考証が不可欠ではなからうか。付論で『梅松論』の作者についての考察がなされるが、やはり分断されると読者は理解しにくいのではないか。

「鎌倉武家政権と政治思想」では、源頼朝・実朝、北条泰時・時頼および得宗専制期を取り上げて、武家政権の政治思想の展開をあとづける。頼朝政権では寿永二年を画期として考察、みづから清和天皇を祖とする源氏嫡流であることを強く意識し、皇室の尊厳性を軸とする伝統的な政治思想を濃厚に受け継いでいることなどを指摘している。実朝政権では、彼が後鳥羽院の忠実な臣下であったという。頼朝における皇室への尊厳と、実朝における皇室への忠誠は、あまりにも異質であるが、同じ源氏の嫡流でありながら、どうしてこのような差異が生じるのか。両者の人格の相違にのみ解答を求めるわけにもいくまい。い、うまでもなく二代將軍は頼家であるが、頼朝から頼家・実朝へ政治思想の継承がスムーズにいかなかったのはなぜか。この点、疑問として残るところである。承久の乱を経て政権を担ったのは北条氏であった。北条泰時政権は頼朝時代とは異なり、在地御家人層による合議制が採用される。古代からの伝統的な政治思想を払拭し、新しい政治理念がつくりだされた。合議制を行う際の基準は「道理」であった。著者は「貞永式目」から「道理」の概念を丁寧な位置づける。さらに時頼の時代になって、儒教の理世・撫民思想が幕府存立の根拠となったことを指摘、続く得宗専制期においても儒教的政道論・徳治思想が受容される。北条氏は政治思想がうまく継承されるのである。

「南北朝の公家の政治思想の一側面——北畠親房・二条良基における儒教的徳治論への対応をめぐる」は、承久の乱以

降、武家の政治思想となった儒教の徳治主義に對して、公家の親房・良基はどのように對応したかを論じたもの。儒教では正しい政道を行う者が血統に関わりなく政治を担当する資格があるとみなす。親房はこれに對して、天皇の「特殊な相對化」を創出し、武士と同列化させず、天皇はその祖先神によつて特殊な地位を保証されると考えた。良基は神孫為君說などの伝統的諸觀念を儒教的徳治主義の思想のなかに包摂ないし吸収させたという。両者の立場の違いがそのまま思想となつて現れた感があるが、より現実的には良基の融合説が以後の政治に大きな影響を与えたのである。

「中世神道における国家と宗教——慈遍の日本神國觀をめぐつて」は、先の「中世神道家の歴史思想——慈遍の『救済史』の構想をめぐつて」とも通底する論考。神道家・慈遍が国家と宗教との関わりをいかに考えていたかを分析する。慈遍は日本國を本にして尊、諸外國を末にして卑とする國際的秩序、天皇を上にして尊、民を下にして卑とする国内的秩序を基本に、天皇は神意を受けて地上世界全体の主であり、神意を受けて広く天・地・人の三才の運行にも責任を持つ存在であるとみていたことを指摘する。こうした上下ないし本末という構図で世界をとらえる手法は、少なからず儒教の影響を受けたものであるが、同時に当時の仏教者の國家觀とは異質である。著者自身もいうように、慈遍の思想が他の神道家にどのような影響を与えたか、さらには為政者が慈遍の思想をどのように受けとめたか、さら

に興味は広がっていく。

「夢窓疎石と初期室町政權」は、足利氏と深い關係にあり、多くの弟子を擁して思想界に不動の地位を築いた夢窓を取り上げる。著者の指摘は明確に四点に及ぶ。第一は夢窓が佛法を世法ないし王法に優越させ、世俗の政治權力者を相對的權威しかもちえぬものとみなしていたこと。第二に夢窓が伝統的秩序觀を受け入れて、天皇を君、足利氏を臣とみなすと同時に、一切の權力者は仏の下では同列であるとしてらえていたこと。安国寺・利生塔・天龍寺の建立は一切の生き物に悟りをもたらし、もつて世の平安を実現させようとしたこと。第四に夢窓の思想が尊氏・直義の思想と共通すること。これらの諸点は、従来の研究にはみられない方法によつて導き出されたものであり、結論は説得力を持つ。ただ、いくつか疑問も残る。たとえば、夢窓は足利氏だけではなく、北条氏や後醍醐天皇などとも結びつき政權と深く関わっているが、これをどう評価するかは説の分かれるところである。著者は「夢窓が外護者を乗り換えたのは、佛法至上の立場を彼が放棄して時の權力者に追隨した結果ではなく、逆に佛法至上の見地から佛法興隆の役割を果たしうる人物を主体的・能動的に探求・選択した結果である」と解釈している。しかし、夢窓自身は名利を欲しないといひ（『夢中間答集』）、為政者の側から夢窓に近づいてきた事實を考えると、「外護者を乗り換えた」との表現に違和感を覚える。また安国寺・利生塔・天龍寺の建立は一切の生き物に悟りをもたらすという問題

も、この時期『太平記』にみられるように、怨霊が跳梁すると考えられていたことを前提にしなければならぬと思われる。そして、夢窓が一切の戦没者の霊を弔うことによつて世の平安が訪れると考えた(怨親平等の法門)点についても、すでに篠崎勝氏が指摘したように、華嚴思想との関連を視野に入れなくてはならないであろう。特に天龍寺創建の問題は、後醍醐天皇の霊をいかに扱うか、いいかえれば夢窓が「天皇」をいかに位置づけていたかを知るうえで重要であろう。さらに著者は夢窓の思想が尊氏・直義の思想と合致すると指摘したが、尊氏と直義の間に思想的差異がないのか検討に値すると思われる。とはいえ、これまで禅僧としての側面のみが注目されていた夢窓を、政治思想との関連でとらえなおした論考は画期的であるといわなければならない。

「室町政権の確立・完成と政治思想——足利義満治世期をめぐつて」は、前稿をうけて、足利義満政権の政治思想を考察する。初期室町政権は儒教の徳治主義(有徳者為君説・治世安民論・易姓革命論)を積極的に摂取するものの、そのままの形ではなく、有徳者執政論(有徳にして治世安民を実現しうる者が、実質的に君主として政を執るのが当然であるという考え)という形で受け取ったことを指摘する。そのうえで、義満はみずからの政治行為を思想的に根拠づけをし、さらに義満治世後半に至つて、儒教の徳治主義がそのままの形で受容されるようになったことを明らかにしている。これはとりもなおさず義満が皇位篡奪を図つ

た結果であつた。ただし、義満自身にどれほど徳治主義が意識されていたかは疑問である。あくまで周辺の禅僧の間での政治思想にすぎない。それは義満個人に対しての意識であつて、以後の將軍に普遍化させて考えてよいかどうかは別問題であろう。義満以後の將軍がはたして義満同様の政治思想を継承できたか、あるいは周辺の人物がそれを容認したか、われわれへの課題として受けとめたい。

「梅松論」の著者と夢窓・親房」では、前稿の再論を行い、南北朝期の思想家に共通して「政治理想の高き揭示と地上一切の権力者の相対化」がみられるという、興味深い結論が用意されている。そして、中世的思想の特質として、理想と現実の事態とを理想の側に重きを置いて関連づける方法であつたと指摘する。

以上、本書を概観してあらためて中世という時代が多様な価値観を持つていたことが理解される。承久の乱を契機として古代の価値観は大きく崩れ、天皇が絶対的ではなくなった。こうした状況のなかで何者かが政権を奪取したとなれば、なにゆえ彼が政権を持ちうるのか、理論的な裏付けが必要になる。それは為政者自身の側からの要請でもあり、また第三者である場合もあるが、混乱した時代であるだけに、さまざま理論を駆使して彼を正当化し、あるいは批判することになるであろう。混乱の時代は思想史においてはある意味で質的に「発展」するともいえよう。当然ながら、そこには完成された理論ばかりがある

のではなく、試行錯誤を繰り返しながら一つの方向性を見出すとするのである。このような経緯を考えてみるならば、本書で取り上げられた歴史観なり政治観なりは、中世において政道を担当する者が、その事実をどのように位置づけるかを語る「神話」であるといえよう。著者が指摘するように、中世ことに鎌倉時代では人間を超えるものに歴史展開の原因を求める歴史観が主流をなすし、南北朝期には儒教思想が重要な意味を持つことが理解された。中世思想史を扱う本格的な著書が出版されたことは大きな喜びであり、本書から学ぶべきことはあまりに多い。

(同志社大学嘱託講師)

辻本雅史著

『「学び」の復権——模倣と習熟』

(角川書店・一九九九年)

高橋 文博

—
本書は、重厚にして明晰な近世日本の教育思想にかんする研究業績『近世教育思想史の研究』をもって知られる辻本雅史が、危機的様相を深めている現在の教育をめぐる状況に問題解決の視点を提示しようとして、警世の志をもって世に問うた書物である。

—
本書は、いわゆる学術研究書としてではなく、一般書として企画されたようであるが、分析や論証において厳密性を十分に保持した上で、最新の知見が提示されている。学術研究書としても高い水準にあることは確言してよい。

—
まず、内容の紹介をする。本書の構成を「目次」にしたがって示すと、次の通りである。

序章 「滲み込み型」と「教え込み型」

第一章 手習塾（寺子屋）の学習